

弱視児の読み書きの指導について

北海道鷹栖養護学校(元北海道旭川盲学校)

教諭 橋詰 郁朗

I 弱視児は漢字が苦手

弱視児は漢字の読み書きが苦手

- 漢字のテストの点がいつも悪い
- 漢字は、一回覚えてもすぐに忘れる
- 漢字の細部をよく間違える
- 書いた漢字のバランスが極端に悪い
- 漢字の学習をととても嫌がる
- 漢字は読めるが書けない
- 文章を書かせると平仮名ばかりになる

これまで多くの文献や研究会のレポートで、弱視児の漢字の苦手さが報告されています。この後、「漢字が苦手な弱視児」へのいろいろな支援をご紹介します。日々の指導の参考になれば幸いです。

学習指導要領での文字指導

特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編(H30年3月)

第3章 第2 視覚障害者である児童生徒に対する教育

普通の文字の指導については、漢字を部首に分解し、基本漢字を徹底して指導するなど漢字の読み書きの指導が重要である。また、教科書等の縦書き・横書きなどのレイアウトに慣れ親しんだり、視覚補助具を活用して速く読み書きができるようにしたりすることなどが大切である。

学習指導要領解説の中でも、漢字指導に対して特別な配慮が必要なことが書かれています。

Ⅱ 手本の漢字を分かりやすくする配慮

1 手本の漢字を大きくする

(1) 光学機器での拡大する

- ・拡大読書機で漢字を拡大して見る
- ・ルーペで拡大して見る

(2) 手本の漢字を大きな文字にする

- ・大きな文字のプリントやカード
- ・タブレットやパソコンで拡大する

弱視児が漢字が苦手な最大の理由は文字が見づらいことです。いかに見やすくするかが何ととっても一番の配慮です。単に「見える」だけでなく、「細部まで容易に見える」ことをめざします。

2 見やすいフォントを使う

(1) 「UD教科書体フォント」を使う

UD教科書体 「線」「止め」「払い」の全部が分かりやすい

ゴシック体 「線」は分かりやすいが、「止め」「払い」が分かりづらい

明朝体 「止め」「払い」は分かりやすいが、「線」が分かりづらい

教科書体 「止め」「払い」は分かりやすいが、「線」がやや分かりづらい

同じ大きさの文字でもフォントによって見やすさは大きく異なります。UD教科書体は、弱視者へのアンケートで、もっとも見やすいフォントであるという結果がでています。

3 漢字の部品を音声化する

(1) 漢字の「画」や字形の特徴を言葉で示す

例：漢字の画を言葉で言いつつ書く(「よこ」→「かぎ」→「よこ」...など)

(2) 字形の特徴を言葉で示す

例：「横線は2本」「つきぬける」「左はらい」など

(3) 漢字の部品を言葉で示す

例：「にんべん」の右に「ほん」で「からだ」など

漢字の部品の音声化は、視覚を聴覚で補い、漢字を正しく認識する補助になります。部品名を覚えてしまえば、子どもが知らない漢字も、言葉だけで字形を伝えることができます。

4 その他の細部に注目させる工夫

- (1) 間違えた部分を拡大して確認させる
- (2) なぞり書きをさせる
- (3) 小学部低学年の基本漢字を丁寧に教える
- (4) 間違いやすい部分に印をつける、色を変える
- (5) 誤字の分類表を作る
- (6) 漢字を部品に分解して練習後、組み合わせる
- (7) へんやつくりを言葉を添えて書かせる
- (8) 毛筆で大きく書かせる

漢字は基本的にいくつかの部品を集めて一つの文字にしたものなので、部品の一つ一つを丁寧に教えることが大切です。

Ⅲ 書くことへの配慮

1 自分が書いた漢字を見やすくする

- (1) 色の濃い筆記用具を使う
 - ・2B程度の鉛筆(4Bはこすれると黒くなる)
 - ・フェルトペン(失敗を直せない欠点)

- (2) 色が濃くて太さが一定の筆記用具
 - ・シャープペン(2B 芯の太さも調整)
 - ・ボールペン(消せるボールペン)

弱視児は自分で書いた文字も見えづらいことが多く、間違えて書いてしまったり字形のバランスが悪くても気づかないことがあります。

(3) 大きく、太く書く筆記用具を使う

- ・毛筆、水習字など

(4) 書きやすい、見やすい環境

- ・書見台の活用
- ・手元が影にならない配慮
- ・羞明に対応した用紙の色

自分が書いた漢字を見ることは、自らへのフィードバックとなります。このことは、書字の間違いを確認するだけでなく、漢字学習の意欲や、覚えやすさにもつながります。

2 書く練習の負担を減らす

(1) 視線の移動を減らす

- ・手本の文字を練習用マスの横に配置する

例→

漢	
漢	
漢	
漢	

(2) 書見台を使う

- ・光が入りやすく、見やすい、前屈みにならずに書ける

(3) 「書く」以外の学習方法も取り入れる

- ・「空書き」をする
- ・漢字の部品を言葉で言う

視力が低いと、視距離が近くなり、書くことに負担がかかります。書く苦
労から漢字を嫌がる子どももいます。書く負担を減らすことは学習効率を
上げることにつながることもあります。

3 文字形を整える工夫

- (1) マス目、補助線のついたノートを使用する
- (2) 一画めの始点を明示する、始点にシールをはる
- (3) 良い字とそうでない字を比較させる気づかせる
- (4) 手本を横に置き、見比べながら練習する
- (5) なぞり書きをさせる
- (6) 立体コピーを指でなぞらせる
- (7) 毛筆でバランスを意識させながら書かせる

丁寧に指導することは大切ですが、あまりに指摘しすぎると漢字学習への意欲を失うこともあります。褒めながら、楽しみながら少しずつ改善していくことが大切です。

IV 学習方法の工夫

1 漢字を分解・合成しながら学習する

①漢字を偏や旁などの部品に分解し、部品には名前をつける

例 「字」＝「うかんむり」と「こ」

「意」＝「たつ」と「にち」と「ころ」

②漢字の部品を組み合わせる

- ・言葉で部品名を言いながら漢字を書く
- ・教師が出した漢字の問題を部品名で答える

例 先生「意見の意の字は？」

生徒「たつ・にち・ころ」

など...

この指導法を説明した本や教材が市販されています。著者は元盲学校の教員をされていた方です。視覚を聴覚で補う、盲学校らしい指導法とも言えます。

2 漢字を「成り立ち」を使って学習する

(1) 漢字学習辞典等で漢字の成り立ちを学ぶ

- ・どうしてこのような形をしているのか(象形文字、指事文字)
「木」は木の形、「シ」は水滴、「山」は山の形 等
- ・どうしてこのような部品を組み合わせているのか(会意文字)
「森」は、木がいっぱい
「動」は、「重」たい物を強い「力」で「動かす」
- ・どうしてこのように読むのか(形声文字)
「花」は植物を意味する「くさかんむり」と音をあらわす「化」

漢字を何度練習しても覚えられない子どもや、すぐに忘れてしまう子どもには漢字の成り立ちを使って学習することが有効です。漢字の字形が印象付けられることで覚えやすく、忘れづらくなります。

3 漢字を「語呂合わせ」を使って学習する

(1) 漢字学習辞典を使い「語呂合わせ」で覚える

- ・「語呂合わせ」が載っている漢字学習辞典を使います
- ・言葉に出しながら語呂合わせを言うなどして覚えます

例:宝＝「**ウ**つくしい **玉**が **宝**ものです。」

(2) 漢字の「語呂合わせ」や「自作成り立ち」を子どもと作る

例:「熊」＝「**ム**っ」とした**熊**が「**月**」明かりを歩いていて足跡が「、、、」

例:「恥」＝恥ずかしいと「**耳**」が赤くなる、恥ずかしいと感じるのは「**心**」

「語呂合わせ」は、漢字の形を意味付けすることにより忘れづらくする学習方法です。原理は社会科の年号を覚える「語呂合わせ」と同じです。弱視児は漢字を書くことが負担になりやすいので、「成り立ち」や「語呂合わせ」を使うことで、たくさん書いて漢字を覚える負担を減らすことにもつながります。

4 漢字を忘れづらくする工夫

(1) 視覚、聴覚、触覚の多感覚で覚える

- ・立体コピーの文字を指でなぞる
- ・毛筆で漢字を書く
- ・漢字部品を声に出しながら漢字を書く

(2) 定期的な復習をする

- ・漢字を忘れるスパンを調べ、忘れる前に復習をする
- ・フラッシュカードなど、負担の少ない方法で定期的に復習する

一度覚えた漢字を忘れやすいことも弱視児の特徴かと思います。漢字指導の際には、一度覚えるだけでなく、忘れないように定着させることも考えていく必要があります。

5 漢字学習のやる気を育てる工夫

(1) 努力が成果となって分かる工夫

- ・取り組んだ成果が分かるようにする → 漢字検定など
- ・練習したことが報われるようにする

例:「はね」などの小さな間違いでは完全な×にしない(部分点)

(2) 少ない努力で、大きい成果が出る

- ・苦手な学習方法は極力避ける

例:書くのが嫌いな子は、「書いて覚える」以外の方法も取り入れる

- ・その子にあった効率の良い漢字学習方法を提案する

(3) やる気が出る教材の工夫

- ・子どもの見え方、興味関心に合わせた教材等(自作、市販、ネット教材等)

「やる気が出る」ようにすることが、一番の支援かもしれません。

V 基礎となる力の確認

1 視覚認知力の問題

(1) 弱視児は視覚認知力が育ちにくい

- ・物を正しく認識するには視力の他に視覚認知力が必要
- ・物をしっかり見ることで視知覚は育つ

(2) 視覚認知力は文字学習に大きく影響する

(3) 視覚認知力は検査できる

- ・「フロスティッグ視知覚発達検査」「WAVES」などが有効

(4) 視覚認知はトレーニングで育てられる

- ・市販やネット上に多くの教材を使う
- ・子どもの状態に合わせて自作教材を作成する

特に強度の弱視の子どもの場合は、視覚認知について事前に確認しておく必要があります。漢字の習得に大きく影響します。

VI 指導教材の工夫

1 市販・ネット教材のすすめ

(1) 興味・趣味に合わせた市販教材

- ・「恐竜」「鉄道」「昆虫」「怪談」等、様々なものがある

(2) 語呂合わせの市販教材

- ・語呂合わせが出ている漢字学習辞典

(3) 漢字の成り立ちの市販教材

- ・漢字成り立ちが出ている漢字学習辞典

(4) ネット教材

- ・たくさんあるネット上の教材やアプリを利用する

本屋に行くと、実に様々な漢字学習教材が販売されています。その中から子どもにあったものを探すことも、支援方法の一つです。

2 自作教材のすすめ

(1) 自作教材はその子だけのオーダーメイド教材

- ・その子の興味関心に合わせる(例文、キャラクター、趣味)
- ・その子の障がいに合わせて(文字の大きさ、問題の量、線の太さ、...)
- ・「power point」「key note」などで、面白く工夫もできる

(2) 自作教材は教師の「指導の腕」を上げる

- ・工夫を重ねると子どもの実態(配慮の場所)がより鮮明になる
- ・教材を「考える」ことが、教師の思考力を高める
- ・自作教材が成功すると、教師のやる気もアップする

自作教材こそ、その子にとっての「究極の教材」となるかもしれません。
担当者のやりがい、腕の見せ所かも…。

VII 最後に…

ある視覚障害教育の研究誌で見つけた言葉です。

従来から弱視児の書字指導は困難であるという指摘は、「弱視児に特別な配慮をしない場合は」という条件付きであって、指導の仕方次第で晴眼児と同等のレベルまで達しえる。

**頑張るべきは、「子ども」ではなく、
「教師」なのかもしれません。
みんなで頑張りましょう！**

最後まで見ていただき
ありがとうございました！